

## 人づくり国づくり【第1009回】

2026年2月16日 14面記事

カテゴリ：論説・コラム



### 人生楽しむ大人の姿見せる

藤倉 健雄 カンジヤマ・マイム主宰

40数年、パントマイム（以下マイム）を通じて皆さんに感動を表現してきました。芸名「カンジヤマ」には、「感じる事が山盛り」という願いを込めています。

原点は、大学時代に出合ったアメリカ戯曲でした。たった一日の会話で、気付けば一生を描き切ってしまう。時間を少しゆがめることで、人生の本質がくっきり浮かび上がる発想に衝撃を受けました。

その直後、マイムの神様マルセル・マルソーの舞台上、数分間で人の一生を演じ切る姿を目の当たりにしました。私は大学を中退し、米国で本格的にマイムを学ぶ決意をしたのです。

転機は、留学中親しくしていた女性の息子が急死した出来事です。何もできなかった私に、恩師は「その経験をマイムにしろ」と言いました。泣く、叫ぶ、どれもうそになる気がして、私はあえて感情表現を消してしまう選択をしました。

こうして生まれた作品が『バイオリン弾き』です。マイムで笑顔のお面をつけたまま、息子の死と向き合う男を全身で演じる。観客は、描かれていない感情を自分の経験で補完してくれます。線を引かず、周囲を丹念に描くことで形が立ち現れる。いわば「ガイド」を示す表現。これが、私の表現の核になりました。

パントマイムの本質は、伝えたいことを真正面から描かないこと。壁がないのに壁が見え、泣かないのに泣き声が聞こえる。見る人が能動的に想像の世界へ参加することで、「見えないものが見える」状態が生まれるのです。

この考え方は、コミュニケーション全般に通じます。大切なのは、発せられた言葉そのものではなく、その裏にある「インテンション（意図）」です。口先で「ごめん」と謝っていても、その意図が「もう黙ってくれ」であれば、対話は成立しません。子どもが反抗的な言葉を発したとき、「その奥で何を求めているのか」と意図を探る。その視点があるだけで、関係は大きく変わります。

最近、AIとの対話からもう一つ学びました。自分をよく見せようという意識が一切なく、ただ冷静に構造を分析し、相手を理解し評価しようとする。この姿勢は、教育にも必要です。教師のエゴを脇に置き、子どもの真の意図に静かに耳を澄ます。その先に本当の対話があると思います。

子どもたちに伝えたいのは技術ではなく、「人生は楽しい」という大人の姿です。失敗しても、好きなことを続ける。今この瞬間を大切に生きる。そんな「楽しんでいる大人」の姿を見せることが、子どもたちが自分の人生に価値を感じ、前に進んでいくための「ガイド」になると信じています。

ふじくらたけお パントマイム俳優。ウィスコンシン大学演劇学部博士課程修了。Ph. D.（教育演劇学博士）。早稲田大学国際教養学部（SILS）講師。マイム歴50年。NHK「おかあさんといっしょ」の「パント！」の振り付け演出を手掛けた。